

---

# きらめきの彼方へ

ロキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きらめきの彼方へ

### 【NZコード】

N5490A

### 【作者名】

ロキ

### 【あらすじ】

いじめられた過去がある主人公（亜美）はいじめられている人の闇を取り除き、いじめてる人に裁きをくだすBlackAngel（黒い天使）と、言う仕事をやっている。いろんな人の心の闇とは？

## プロローグ

いつだつただらうか。いじめと、言ひ辛さを知つたのは。あの時まで幸せだつたのにいつのまにか、つらくなつた。これも時間の流れなのか。

## 第一話過酷とは？

私はいじめにあった。何も理由もなく。ただ地味で暗くて…それだけだった…そんな勝手な理由で人の心をズタズタにした奴らを許せなかつた。奴らに復讐（ブラック・エンジェル）してやりたかつた。それが、私の闇だつた。それをきっかけにBlackAngelの事を知つた。それから私はBlackAngelに入った。

きっかけはこんなので良かつたのか…

今も思う。

BlackAngelの仕事は心の闇を取り除き回収する事、闇を作つた人に裁きをくだすこと。おおまかに言えばそういうことだ。BlackAngelには階級が存在する。一番下が兵士、次が見張り人、上等兵、幹部、そして一番上がボス。

そんなに難しいことはない。だが、誰でも入れるわけがなかつた。ただ、

「いじめられたから入りたい」

と言つ簡単な事だけじゃはいれないのである。

ちゃんと兵士から修行するのである。兵士の修行は過酷で辞める人が後を断たない。

だから、本当にやりたい人しか残らない。私もそうなのだ。最初は

「もういじめられたくないから」

と、言つ理由だった。兵士時代過酷な労働をやらせられた時、

「やっぱり本気で、なりたいんだな。」

と実感したぐらい重労働だつた。

しんどくて、自分を毎日追い詰めて自分と毎日向き合つて…

心理的にボロボロだつた。

訓練も自分がもしこう言つ状態だつたらとか、友達がもし心が痛んでいたらどういう対応するかを、学んだ。

### 第3話会議・話の発端

（見つけた。仕事だ。）私は心中で思った。  
亜美のクラスは一組だがいじめられていると、思われる子は三組  
だった。その子とはいぐらか話した事があるぐらいであまり面識  
がなかった。

「名前…なんて言つんだろ？」

その子の後ろ姿を見ながらポツリと言つた一言。

「かなり、ひどいな。早くしなければ…闇に支配されて、引きこ  
もるか、追い詰めすぎて自殺するか。」

さすがに、亜美も周囲の田を気にし始めた。周りからせひソヒソ  
声が聞こえる。

「私としては、引きこもりの方がまだいいんだが…自殺だけはす  
るなよ。」

と、言い残し自分の教室へ帰つて行つた。

いつたい誰に向けた言葉だったのか…

放課後になつた。亜美は情報を求めて部下たちを図書室に呼んだ。  
もつとも、部下と言つても5人しかいないので…「どーしたも  
のでしよう…」

と、眼鏡をかけた黒髪の少年は困り顔で言つ。 「ほつときやいー  
のよ。」と、金髪の美少女が答える。

「そんなんあーそれじゃあ遅いですよ。」

「あつそ。あれ…後の二人は？」と、金髪美少女は離れた所に居  
るちょっと不良気味な男に話かける。

男はツッパツタ言い方をする。

「はあ？ 知らねえよ。」亜美はため息混じりで言つた。

「しうがないわよ。あの二人は逃げるだけだから。」

「まつたく先輩だからつて、亜美の言つこと聞かないんだから…

たくつ！ムカツクぜ。」

「ケン。言葉使いには気を付けなさい。」

亜美は淡々と喋る。亜美はクールでいつも冷静なのだ。あの不良はケンと言つのか…

「水野、マナ仕事だ。」

水野と呼ばれた眼鏡の少年とマナと呼ばれた金髪美少女は…

「ハイツ。指揮官」

と、同時に返事をした。

「ケンもね…」

ケンは二人に比べてだるそうに返事をした。

「あ～はいはい。」

「まついいか。これにて解散。なにか情報があつたら連絡よろしく。解散！」

これで会議は終わった。

## 第4話現場と約束

亜美は図書室から出ると、女子トイレから叫び声が聞こえる。

「助けて、誰かあ」

と、大声で言っているのが聞こえる。

亜美は女子トイレに近付いた。走ると、足音が響くので走れないのだ。

そつと、ドアの隙間から見る。一人の周りに三人ぐらい取り囮んでいる。

「お前さあ優等生ぶつてんじゃあねえよ。何、点数稼いでんだよ。と、言い真ん中にいた女子の胸ぐらを掴み脅している。「点なんか稼いでません。」

と少女は反論する。

「何言つてんの?ウチラに反論するの?」

「反論はしないほうがいいよ~」

「そうね?」

残りの女子が言つた。「まつ今田はこの辺にじとじつか。下校時刻だし。」

「そうだね。」

と、一人のなかのひとりがいう。

「告げ口なんかするなよなあ~」

「じゃつ。バイバイ」

と、言い女子トイレから出て言つた。  
行つた後も笑い声が聞こえる。どうやら、亜美には気付かなかつた。

亜美はいじめられてた少女に近づく。「点なんか稼いでません。

と少女は反論する。

「何言つてんの?ウチラに反論するの?」

「反論はしないほうがいいよ~」

「そうそう。」

残りの女子が言つた。

「まつ 今日は「」の辺にしどけつか。下校

時刻だし。」

「そうだね。」

と、二人のなかのひとりがいう。

「告げ口なんかするなよな~」

「じゃつ。バイバイ」

と、言い女子トイレから出て言つた。

行つた後も笑い声が聞こえる。どうやら、亜美には気付かなかつたらしい。

亜美はいじめられてた少女に近付く。 「大丈夫？」

と、声をかける。

「ありがとう。さつきの……秘密にしといてくれない？」

「ああいいよ。突然だけど名前教えて？」

少女はびっくりしたようだ。

「いいよ。でも、あなたの名前も教えてね。」

「いいけど。」

「私の名前は鈴木絵美。」

「私は東大寺亜美。よろしく。」 「絵美。なんか悩み」とがぶつたら相談にのるから。」

「えつでも……」

と、絵美は口ごもる。

「名前を教え合つたんだから知らない人じゃないだろ。」

「そつだけど……」

また、口ごもる。 「誰にも言わない。約束。」

亜美は小指をだした。

「や・く・そ・く」

「うん。じゃあ今でもいい?」

「ああいいよ。何時間でも聞いてあげるから。」

絵美は話始めた。「絵美。なんか悩みごとがあつたら相談にのるから。」

「えつでも…」

と、絵美は口ごもる。

「名前を教え合つたんだから知らない人じゃないだろ。」

「そつだけど…」

また、口ごもる。

亜美は小指をだした。

「や・く・そ・く」

「うん。じゃあ今でもいい?」

「ああいいよ。何時間でも聞いてあげるから。」

絵美は話始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5490a/>

---

きらめきの彼方へ

2010年12月18日17時28分発行